

教員養成としてのダンス教育について — 「筑波大学卒業ダンス公演」の事例から —

寺山由美*・佐藤菜美**

Dance education as the teacher training — About "Graduation dance performance" at Tsukuba University —

TERAYAMA Yumi* and SATO Nami**

1. はじめに

平成27年2月7日(土)・8日(日)、筑波大学にて、日本教育大学協会全国保健体育・保健研究部門第34回(通算62回)全国創作舞踊研究発表会(つくば大会)が開催された。この大会は、全国の教員養成系大学・舞踊文化・舞踊教育関連大学に所属する教員並びに学生が一堂に会し、特に、舞踊教育に関する実践と研究の発表、ワークショップを共有することによって、教員と学生の理論的実践的な資質や能力の向上を図ることを目的に開催されている。毎年、国立教員養成系大学が主管となり開催されるこの大会を平成26年度は筑波大学主管で開催した。

この大会は、通常12月に開催されているが、筑波大学の「卒業ダンス公演」と重なるために今大会のみ特別に2月開催にして頂いた。「筑波大学卒業ダンス公演」は、舞踊研究室主催で開催している行事である。かつては、舞踊専攻生の卒業作品を発表するというのが主たる目的の会であった。しかし、平成12年に村田芳子先生が筑波大学に着任されてから、舞踊専攻生や授業履修者のみならず有志学生も参加し、毎年出演学生が総勢300人を越えるような大きな会となった。筑波大学体育系から巣立つ学生が未来のスポーツ・体育界を担うであろう人材であることを考えると、多くの学生たちがダンスに触れる機会を提供していることは意義深い。このような筑波大学の「卒業ダンス公演」の取り組みを、全国の舞踊教育関係教員並びに学生の皆さんと共有して頂くために、全国創作舞踊研究発表会と「卒業ダンス公演」を兼ねさせて頂いた。

これを機に、今一度、教員養成としてのダンス教育という側面から「卒業ダンス公演」を捉えてみたい。



写真1 第34回全国創作舞踊研究発表会(つくば大会)プログラム表紙

2. 筑波大学卒業ダンス公演について

筑波大学舞踊研究室は、東京教育大学時代より舞踊教育のメッカとして多くの舞踊関係者を輩出してきた。「卒業ダンス公演」は、筑波大学の前教員であった、川口千代先生、若松美黄先生、頭川昭子先生の時代から毎年開催されてきた。趣旨としては、舞踊専攻生の卒業作品を上演することと、体育専門学群生対象のダンス授業での成果を発表する

* 筑波大学体育系
Faculty of Health and Sport Sciences, University of Tsukuba

** 新潟明訓中学・高等学校
Niigata Meikun Junior and Senior High School

ためであった。

これらの趣旨は、現在も変わらない。しかし、現在は、授業履修生以外の、いわゆる有志の学生が大勢出演するように変わっている。これは、先述したように村田芳子先生が本学に着任されてから、既習学生を含めた多くの学生に門戸を開いたからである。現在では、学群1年生から大学院生までが出演している。130名程度の授業履修生は学習の成果を発表するために出演を義務づけているが、他の170名程度は有志出演者であり、既習学生ないしダンス初挑戦の学生たちである。

3. 体育系の学生に対して

全国創作舞踊研究発表会が64年前より、教員になる学生たちの舞踊作品発表の場として開催されてきたのは、学生たちに舞台上演の経験を提供できるからである。すなわち、ダンス学習の進んだ段階として、舞踊作品を創り発表することの経験を実際に体感して学ぶことができる。通常の大学では舞台を所有していない場合が多く、まして舞台に照明をつけて上演することは難しい。だからこそ、教員養成系大学の教員と学生が参集し舞踊作品発表会を開催することで、多くの教員の卵たちに舞台に立つ経験をさせることを可能にしてきたといえる。また、全国から一堂に会することで互いの作品鑑賞もできる。ダンス教育では、「踊る・創る・見る」が重要であるといわれているが、それらの学びを可能にする機会になっている。

筑波大学の「卒業ダンス公演」では、これらの目的と同じように、学群生・院生に対して「ダンスを踊る」機会を提供することができる。また、教員にならない学生であっても、舞台上演の機会を得ることは、大きな経験となるだろう。現在、オリンピックレベルで活躍している選手の中には、学生時代にこの公演に出演した際、お客を目の前にした本番の雰囲気飲まれ、頭が真っ白になって失敗した学生もいた。この学生は、公演が終わってから、自分でも理解できない不思議な身体感覚を味わったと驚きながら話していた。このように、自身の体で経験することにより、身体教育においてダンス特有の学びがあることを理解してくれると考える。

すなわち、「卒業ダンス公演」は体育系の学生に対しては、①「ダンスを踊る」機会の提供、②ダンス学習の進んだ段階を学び、③身体教育におけるダンスの価値の認識、などの面で貢献しているといえる。

4. 舞踊専攻生に対して

一方、舞踊専攻生に対してはどうであろうか。

毎年、「卒業ダンス公演」を運営するために舞踊専攻生が陰日向に働いている。自身が出演することはもちろんであるが、自分の学年の作品創作のリーダーとして仲間を牽引する存在にならなくてはならない。しかしながら、舞踊を専門としない友人たちへの関わりは、どの舞踊専攻生も苦勞することになる。舞踊専攻生同士であれば簡単にできることが、専攻ではない友人にはできないため、的外れなアドバイスをすることも少なくない。また、ダンスを専攻としていない友人の運動の仕方を理解することや、その友人が表現しやすい動きを探すために多くのことを学ばなければならない。出演者たちのモチベーションを下げずにパフォーマンスを上げていく言葉のかけ方や動きの提案など、ダンスを専門としない人への対応を試行錯誤できることは、コーチング能力を向上させるよい機会といえる。舞踊専攻生の多くが、教員もしくはダンス指導者になる現状を鑑みると、これらの経験は指導力向上の一端を担っていると考えられる。

すなわち、「卒業ダンス公演」は舞踊専攻の学生に対しては、①言葉のかけ方や動きの提案を学ぶことができる、②コーチング力を向上できる、などの面で貢献しているといえる。



写真2 出演者全員によるエンディング

5. 卒業後の学生たち

佐藤は、修士論文にて「卒業ダンス公演」を対象にダンス学習における発表会の意義について研究を行った(佐藤、2007)。この研究では、筑波大学にて「卒業ダンス公演」を経験した卒業生を対象にアンケート調査を行い、結果を導き出している。

まず、佐藤は、「卒業ダンス公演」の位置づけについて、「卒業生の卒業を祝う場」「歴史ある伝統行事」「舞踊専攻生の成果発表の場」「授業のまとめ」「主体的なダンス参加の場」としている。

また、「卒業ダンス公演」の出演者や参加形態について、「体育・スポーツに熟練した学生集団」「異性・異年齢集団」「多様なダンスのレベル（ダンスの初心者から上級者まで）」「複数の役割の経験（ダンサー、作者、鑑賞者、舞台制作者）」「300名を越える人数規模」という特徴をあげている。今やダンス学習は男女共習で行われている。また、体育系の学生が一堂に集結することにより「異性・異年齢集団」になり得る環境にある。さらに、舞踊専攻生、有志出演者、授業受講者が、「ダンサー（踊る）」、「鑑賞者（観る）」、「作者（創る）」、「舞台制作者（支える）」という役割を兼ねながら会を運営していることも特記すべき点であろう。

このような経験をした卒業生たちは、卒業後どのようにこの経験を生かしているのだろうか。教員として現場に立っている卒業生の声を佐藤が収集した。

「卒業ダンス公演の経験と現職との関わりについて」の質問に対し、大きくまとめると3つ上げられる。（以下、『』内は卒業生の言葉をそのまま引用。）

①自信を持って生徒の前に立てること

『ダンスの世界が自分の世界の一部になって生徒の前に立てること。自分がダンスしたことありますよって大きい！と思っています。』

②仲間が増えたこと

『卒公（＝卒業ダンス公演）だからできた友達多数。（教員の）仕事を始めてもいろいろと聞いて頼りになります。』

③公演を作り上げる過程を学べること

『学校は意外とイベントが多いが、対観客的な経験をもって何かを成し遂げている人は少ないからとても貴重。運営のマネージメントを学べるのは大きい！』

その他には、『体専のほとんどの学生が競争のなかに生きてきた中で、そうではない価値観で体を動かすことの楽しさを感じられた』や『ダンス専門じゃないから、卒公がダンスのほぼ全てを占めているって感じ』などの回答も得られた。

現職の教員となって、様々な面で「卒業ダンス公演」の体験が生かされていることがわかる。

6. まとめ

体育系の学生は、各部活動毎にお揃いのジャージやユニホームを作っている。「部活以外でお揃いのシャツを着たのは卒公だけだった」とある学生が話してくれた。日々、競技に邁進する学生たちだからこそ、スポーツにはないダンスの特性をより一層体得しているのかもしれない。卒業ダンス公演は、身体での対話や人間関係の構築などを学ぶ機会として、また未来の指導者を輩出する場である使命を再認識し、さらなるダンス教育の向上に務めたい。

最後に、「卒業ダンス公演」の隆盛および成果は、舞踊教育に尽力されてきた村田芳子先生の大きな功績であることを記しておきたい。



写真3 村田先生のリードで出演者と観客が一体となって一緒に踊る様子

謝 辞

本研究は、平成26年度筑波大学体育系学内プロジェクトの支援を受けました。この場をお借りして深くお礼申し上げます。

また、舞踊研究会の皆さま、およびご関係の皆さまに心より感謝申し上げます。

文 献

- 1) 松本千代栄他（1992）ダンスの教育学. 大修館書店.
- 2) 佐藤菜美（2007）：ダンス学習における発表会の意義に関する研究～筑波大学「卒業公演」を中心に～. 筑波大学体育研究科研究論文集 29：41-44